

母親の養育行動に影響を及ぼす要因の検討 —子育てに関する怒り感情の評価と他者の子育てをとおした省察との関連—

Factors Affecting Mother's Child-rearing Behavior : Relationship between Evaluation of Mother's Anger at Children and Parental Reflection

杉本 信 (帝京科学大学)
Shin SUGIMOTO (Teikyo University of Science)

要約： 本研究は、子育てをしている母親の養育行動に影響を及ぼす要因を明らかにするために、子どもに対する怒り感情の評価と他者の子育てをとおした省察との関連から検討した。4～5歳児を持つ母親を対象に、子育てをしている母親の『他者懸念』、他者をとおした省察、養育行動に関する質問紙調査を行った。

その結果、以下のことが明らかになった。『他者懸念』と「他者をとおした省察」の『他者モニタリング』との間に有意な正の相関が認められ、怒り感情に対して他者を意識した評価をしている母親は、他の親子を注意深くモニタリングしていることが示された。また、『他者懸念』、『他者をとおした内省』、『他者モニタリング』と『子どもへの注目・関与』との間に有意な正の相関が認められ、怒り感情に対して他者を懸念した評価をしている母親や他の親子をモニタリングしたり、他者をとおした内省をしたりしている母親は、自分の子どもに対して常に注目したり、関心を寄せたりしていることが示された。

I はじめに

近年、核家族化や少子化が進み、母親が一人で育児をすることが多くなり、育児に対する負担感が高まっている。それに伴って育児ストレスや育児不安も高まっており、母親の心の健康のためには子どもに対してイライラしたり腹がたったりする育児ストレスや不安の低減に寄与する要因を明きからにする必要がある。母親が子育てをする上で、母親が持つ子どもに対する否定的感情が育児ストレスと関連することが指摘されている（高橋，2007）。子育てにおける親の感情に関する研究に関して、高濱・渡辺（2007）は、子どもの反抗と自己主張に対する母親の感情と対処の仕方について、2歳児と3歳児の比較から検討している。その結果、子どもの反抗や自己主張に対して母親が否定的感情を強く感じていること、母親の否定的感情が権威的な対処の仕方（腹が立って本気で怒ってしまう等）に影響を及ぼすことを明らかにした。つまり、子育てをしている母親は、子どもが反抗したり、言うことを聞かなかったりするという子どもの態度や言動に対して怒り感情を持っている。そこで、母親が育児ストレスや不安を軽減するためには、母親がその怒り感情とどう

向き合い、どう処理しながら自分の子育てを実践しているのかを把握することが必要である。

怒り感情が生起すると、その感情を抑制あるいは表出した後、その怒り感情がよかったのかよくなかったのかを評価することが明らかにされている（樫村・小川，2007）。鈴木他（1999）は、感情が重要な情報源としての機能を持ち、その情報を処理することが、感情へ注意を向け（モニターし）、その感情状態を調整したり、評価したりする過程であると指摘している。奥村（2008）は、情動への評価の重要性に触れ、人が自分の感情をどのように捉え、どのように評価しているのかを検討した結果、怒り感情を恥ずかしいと感じたり、罪悪に感じたりすることを明らかにした。

感情がその後の認知過程に影響することに関して、菅野他（2009）は、母親が自分の子どもに対する不快感情をきっかけに、子どもの育ちや子どもに対する自分の育児を振り返り、親子関係を再調整すると指摘している。子育てにおける親の認知に関する研究では、朴・杉村（2009）が、幼児の親を対象に子育てにおける認知過程について検討し、他人の育て方を見たり子どもに対する話し方を聞いたりすることで、自分の子育てに必要なことに気づいたり見直したりする「他者をとおし

た省察」をすることを明らかにしている。

以上のことから、子育てにおいて、子どもに対して怒り感情が生じた場合、怒り感情を否定的に評価することや他者をとおした省察が、実際の養育行動に影響することが考えられる。

そこで本研究では、子育てをしている母親を対象に、養育行動に影響を及ぼす要因を明らかにするために、以下の2点を検討することを目的とする。

1. 子育てをしているときの子どもに対する怒り感情の評価と他者をとおして自分の子育てを振り返ったり、見直したりする他者の子育てをとおした省察との関連
2. 子どもに対する怒り感情の評価、他者をとおした省察と養育行動との関連

II 方法

1. 調査対象

東京都江東区立の2年保育のA幼稚園、B幼稚園、C幼稚園の年長組97人、年少組90人の在園児の母親187人であった。質問紙の有効回収率は45.2% (414部配布し、187部回収) であった。

2. 質問紙の構成

a. 基本情報

子どもの属性として年齢、性別、クラス（年長組・年少組）、母親の属性として年齢、職業を尋ねた。

b. 子育てに関する怒り感情への評価の質問紙

奥村（2008）の研究で明らかにされた情動への評価（怒り）で抽出された3因子の中の「他者懸念」尺度5項目を使用した。この尺度は、「怒りを感じることにに対して恥ずかしいと思う」などの5項目からなっている。子育てをしていて子どもに対して怒り（腹がたつ、イライラする）を感じるときに、その怒りに対する感じ方・考え方について「非常にあてはまる」から「まったくあてはまらない」の6段階評定で回答を求め、「非常にあてはまる」を6点、「まったくあてはまらない」を1点として得点化した。

c. 他者の子育てをとおした省察の質問紙

朴・杉村（2009）の研究で明らかにされた親の子育てに関する省察の「他者をとおした省察」尺度11項目を使用した。この尺度は、「いろいろな話を聞いて、自分の子ども観を見直すことがあ

る」などの11項目からなっている。それぞれの項目に対し、日常どのように考えて子育てをしているかについて「いつもする」から「まれにする」の5段階評定で回答を求め、「いつもする」を5点、「まれにする」を1点として得点化した。

d. 養育行動の質問紙

母親の養育行動を調べるために、三鈷（2008）の養育スキル尺度を参考に、養育行動の8項目を作成した。この8項目は、「どんなに忙しくても、子どもと話したり一緒に遊んだりする」、「子どもがわがままを通そうとしてぐずっても取り合わない」などの8項目からなっている。日常、育児をしているとき、どのくらい質問項目のような行動をするかについて、「いつもそうである」から「まったくそうでない」の4段階評定で回答を求め、「いつもそうである」を4点、「まったくそうでない」を1点として得点化した。

3. 手続き

2016年7月に調査を実施した。幼稚園児の母親には園を通して幼稚園教諭から迎えのときに直接質問紙を配布し、回答後、園に質問紙を持参してもらい一週間の留置法により回収した。

4. 倫理的配慮

質問紙調査にあたり、幼稚園園長に研究の目的・方法について口頭で説明した。調査結果は、匿名性を確保した上で公表することがあること、調査データが外部に漏れることがないことを説明し、口頭で了承を得た。

III 結果

1. 子ども及び母親の属性

子どもの年齢は、年長組が5歳0ヶ月～6歳2ヶ月で平均年齢は5歳8ヶ月、年少組が3歳11ヶ月～5歳2ヶ月で平均年齢は4歳8ヶ月であった。性別は、年長組が男児49人、女児48人、年少組が男児46人、女児44人であった。

母親の年齢は、26歳～49歳であり平均年齢は37.4歳であった。職業は、無職154人（82.3%）、フルタイム2人（1.1%）、パート・アルバイト24人（12.8%）、自営業5人（2.7%）、その他2人（1.1%）であり、約8割が無職であった。

2. 子育てに関する怒り感情の評価の項目分析

「他者懸念」尺度の5項目について、単因子構造と仮定し、主成分分析を実施したところ、1成分が抽出された。寄与率が70.33%と高く、すべての項目が0.80以上の主成分負荷量であったため5項目を1成分構造と判断し（表1）、5項目の主成分得点を『他者懸念』尺度得点とした。この尺度の内的整合性を検討するため、クロンバックの α 係数を算出したところ0.89の内的一貫性が確認された。

3. 他者の子育てをとおした省察項目の因子分析

「他者をとおした省察」尺度11項目の因子構造を検討するため、主因子法・プロマックス回転法によって因子分析を行い、因子負荷量が1つの因子について0.40以上で、かつ2因子にまたがって

0.40以上の負荷を示さない11項目を選出した。その結果、2因子が抽出された（表2）。この2因子は先行研究（朴・杉村、2009）の結果と同様の項目が2因子にまとまったので同様の解釈を行った。第1因子は、「いろいろな話を聞いて、自分の子ども観を見直すことがある」など5項目の因子負荷量が高く『他者をとおした内省』因子と命名した。第2因子は、「他人の子どもの言動を注意深く見ることがある」など6項目の因子負荷量が高く『他者の育児や子どもに関するモニタリング』（以下、『他者モニタリング』）因子と命名した。それぞれの因子について、因子構造の内的整合性を検討するため、クロンバックの α 係数を算出したところ0.87、0.87の内的一貫性が確認された。

表1 「他者懸念」項目の主成分分析

質問項目	主成分負荷量
怒りを感じることにに対して恥ずかしいと思うことがある	.89
怒りを感じることにに対してみっともないと思うことがある	.84
怒りを感じるのは情けないと思うことがある	.83
怒りを感じることに申し訳ないと感じるがある	.82
怒りを感じることに罪悪感を感じる	.81
固有値	3.52
寄与率（%）	70.33

表2 「他者をとおした省察」項目の因子分析

質問項目	因子1	因子2
第1因子：他者をとおした内省（ $\alpha = .87$ ）		
他の人の育て方を見て、今の自分の子育てに必要なことに気づくことがある	.93	-.08
いろいろな話を聞いて、自分の子ども観を見直すことがある	.87	-.10
他の人と子育ての話をして、自分の子育ての方針を改めることがある	.85	-.06
他の子ども達と話をすることで、自分の子どもの特徴に気づくことがある	.59	.24
他の人と話しているうちに、子育てに関する疑問が解決することがある	.51	.16
第2因子：他者モニタリング（ $\alpha = .87$ ）		
他人の子どもの言動を注意深く見ることがある	-.18	.83
他の子どもが親と話す様子に注意を向けることがある	.01	.81
他の親の子どもに対する話し方に注意を向けることがある	.05	.75
他の人が子どもにどのように接しているか注意深く見ることがある	-.01	.61
他の子どもが親とかかわる様子を注意深く見ることがある	.30	.54
他人と子どもの話をすることで、自分の子どもの特徴に気づくことがある	.29	.50
因子間相関	因子1	.66
	因子2	

4. 養育行動に関する項目の因子分析

母親の養育行動の8項目の因子構造を検討するため、主因子法・プロマックス回転法によって因子分析を行い、因子負荷量が1つの因子について0.40以上で、かつ2因子にまたがって0.40以上の負荷を示さない8項目を選出した。その結果、2因子が抽出された(表3)。この2因子は先行研究(三鈷, 2008)の結果と同様の項目が2因子にまとまったので同様の解釈を行った。第1因子は、「どんなに忙しくても、子どもと話したり一緒に遊んだりする」など5項目の因子負荷量が高く『子どもへの注目・関心』因子と命名した。第2因子は、「子どもがわがままを通そうとしてぐずっても取り合わない」など3項目の因子負荷量が高く『子どもの不適切行動の無視』因子と命名した。それぞれの因子について、因子構造の内的整合性を検討するため、クロンバックの α 係数を算出したところ0.78, 0.70の内的一貫性が確認された。

5. 『他者懸念』と「他者をとおした省察」との関連

『他者懸念』と「他者をとおした省察」の『他者をとおした内省』及び『他者モニタリング』の評定平均値を算出し、分布の正規性を確認した上でピアソンの積率相関係数を求めた(表4)。その結果、『他者懸念』と『他者モニタリング』との間に有意な正の相関が認められた。一方、『他者懸念』と『他者をとおした内省』との間に関連が認められなかった。

6. 『他者懸念』, 「他者をとおした省察」と養育行動との関連

『他者懸念』, 「他者をとおした省察」と養育行動との関連を検討するため、『他者懸念』, 『他者をとおした内省』, 『他者モニタリング』と『子どもへの注目・関心』, 『子どもの不適切行動の無視』の評定平均値を算出し、分布の正規性を確認した上でピアソンの積率相関係数を求めた(表5)。その結果、『他者懸念』, 『他者をとおした内省』, 『他者モニタリング』と『子どもへの注目・

表3 養育行動項目の因子分析

質問項目	因子1	因子2
第1因子：子どもへの注目・関心 ($\alpha = .78$)		
どんなに忙しくても、子どもと話したり一緒に遊んだりする	.74	.02
忙しくても、子どもの行動をしっかり見るようにしている	.72	.04
どんなに疲れていても、子どもと一緒に運動したりゲームしたりする	.66	-.05
何か家事をしていても、子どもの様子や状況をできるだけ把握するようにしている	.63	-.07
子どもが何をしているかよく見るようにしている	.49	.04
第2因子：子どもの不適切行動の無視 ($\alpha = .70$)		
子どもがわがままを通そうとしてぐずっても取り合わない	.15	.82
子どもが泣きさけんで自分の要求を通そうとしても、相手にしない	-.05	.68
子どもが注意を引こうとしてめそめそ泣いても取り合わない	-.18	.50
因子間相関	因子1	因子2
		-.26

表4 『他者懸念』と「他者をとおした省察」との相関

	他者懸念
他者をとおした内省	.09
他者モニタリング	.19**

** $p < .01$

表5 『他者懸念』, 「他者をとおした省察」と養育行動との相関

	子どもへの 注目・関心	子どもの不適切 行動の無視
他者懸念	.17*	.04
他者をとおした内省	.15*	-.09
他者モニタリング	.23**	-.02

* $p < .05$ ** $p < .01$

関心』との間に有意な正の相関が認められた。一方、『他者懸念』、『他者をとおした内省』、『他者モニタリング』と『子どもの不適切行動の無視』との間に関連が認められなかった。

IV 考察

1. 『他者懸念』と「他者をとおした省察」との関連

本研究では、子どもに関する怒り感情に対して他者を懸念することと、他者をとおした内省や他者モデリングすることとの関連を検討することであった。調査の結果、他者を懸念することと他者をモニタリングすることが関連していた。このことは、怒り感情に対して他者を意識した評価をしている母親は、他の親子を注意深くモニタリングしているが、自分の育児のことは振り返らないことを示している。中山他（2014）の研究では、他者の子育てを参照することと、子育て不安感に正の関連が認められていることから、子育ての不安から他の親子をモニタリングして、参考にしていることが示唆される。

2. 『他者懸念』、「他者をとおした省察」との養育行動との関連

本研究では、母親の養育行動に影響を及ぼす要因を明らかにするため、子育てをしているときの子どもに対する怒り感情の評価と他者をとおして自分の子育てを振り返ったり、見直したりする他者をとおした省察との関連から検討することであった。調査の結果、怒り感情に対して他者を懸念した評価をしている母親や他の親子をモニタリングしたり、他者をとおした内省をしたりしている母親は、自分の子どもに対して常に注目したり、関心を寄せたりしている養育行動を行っていることを示している。この結果は、どんなに忙しくても、子どもと話したり一緒に遊んだりすることや何か家事をしていても、子どもの様子や状況をできるだけ把握したりすることなどの養育行動の背景には、子どもに対する怒り感情に対して他者を懸念した評価をしたり他の親子をモニタリングしたりするという要因が関連していることを示唆している。

V まとめ

本研究では、子育てをしている母親を対象に、子育てをしているときの子どもに対する怒り感情の評価と他者をとおして自分の子育てを振り返ったり、見直したりする他者の子育てをとおした省察との関連から養育行動に影響を及ぼす要因を明らかにするために質問紙調査を実施した。その結果、怒り感情に対して他者を懸念した評価をすることと他者をモニタリングするという省察をすることが関連し、怒り感情に対して他者を懸念した評価をしている母親や他の親子をモニタリングしたり、他者をとおした内省をしたりしている母親は、自分の子どもに対して常に注目したり、関心を寄せたりしている養育行動を行っていることが示された。

参考文献

- 朴信永, 杉村信一郎 (2009). 「幼児を育てている親の子育てに関する省察の3層モデルの検討」. 『発達心理学研究』. 20(2), 99-111.
- 檜村正美, 小川俊樹 (2007). 「不快感情の抑制に伴って生ずる派生的感情について」. 『筑波大学心理学研究』. 33, 89-94.
- 中山智哉, 渡邊望, 春高裕美, 木山徹哉 (2014). 「母親の育児感情に影響を及ぼす要因の探索的検討－母親の育児方法・育児への省察および保育相談支援との関連－」. 『九州女子大学紀要』. 50(2), 15-29.
- 奥村弥生 (2008). 「情動への評価と情動認識困難・言語化困難との関連」. 『教育心理学研究』. 56, 403-413.
- 三鈷泰代 (2008). 「幼児期の子どもをもつ親の養育スキルに関する研究－親の養育スキルと子どもの行動傾向との関連－」. 『発達研究』. 22, 181-190.
- 菅野幸恵 (2001). 「母親が子どもをイヤになること：育児における不快感情とそれに対する説明づけ」. 『発達心理学研究』. 12(1), 12-23.
- 菅野幸恵, 岡本依子, 青木弥生, 石川あゆち, 亀井美弥子, 川田学, 東海林麗香, 高橋千枝, 八木下 (川田) 暁子 (2009). 「母親は子どもの愛着要求をどのように語るか－子どもをイヤになることについての母親の語りから－」. 『白百合女子大学発達臨床センター紀要』. 12, 29-36.

- 鈴木有美, 木野和代, 速水敏彦, 中谷素之 (1999). 「自己と他者に関するメタ・ムード – 不快感情の調整過程に焦点を当てて –」. 『名古屋大学教育学部紀要心理学』. 46, 119-129.
- 高橋有里 (2007). 「乳児の母親の育児ストレス状況とその関連要因」. 『岩手県立大学看護学部紀要』. 9, 31-41.
- 高濱裕子, 渡辺利子 (2007). 「子どもの反抗・自己主張とそれに対する母親の感情および対処」. 『お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要』. 4, 15-25.
- 田中知恵 (2006). 「感情と認知の主要理論」. 北村英哉・木村晴 (編著). 『感情研究の新展開』. 21-42. 京都: ナカニシヤ出版.